セラ－ジェツゥンパ

『現観荘厳論八句義七十義決択』和訳（1）

兵　藤　一　夫

はじめに

『現観荘厳論』は般若経，特に『二万五千頌般若経』，を道の立場から注釈したものであり，インドにおける般若経解釈の一つの大きな流れを形成している。中でも，ハリバドラ（Haribhadra）が『現観荘厳論』に関する注釈，『現観荘厳光明（Abhisamayālaṃkārāloka』（『大註』）や『現観荘厳論明義釈（Abhisamayālaṃkāraśāstravṛtti Sphuṭārthā』（『小註』）を著作して後，その流れは確固としたものとなっていくのである。[(1)]

この『現観荘厳論』の伝統はチベットへと受け継がれていく。ハリバドラの『小註』は既に仏教の前伝期（8～9世紀）に翻訳されてチベットに伝えられているが，その時はまだ本格的に学習された形跡は見られない。後伝期（10世紀後半以降）になって，アティーシャ（Atīśa, 982-1054）がチベットに入り，般若経や『現観荘厳論』を解説したことから，それらの学習が本格的に始められ，以後，チベットにおける学的伝統が形作られていくのである。[(2)]

チベット仏教の中で重要な位置を占めるゲルク派では，『現観荘厳論』は仏教学習の重要な五項目（中観学・般若学・論理学・律学・アビダルマ学）の一つである般若学の中心テキストとなり，顕教における修行論としての位置が確立される。このようにして『現観荘厳論』が仏教の実践の基本テキストとして学ばれるようになると，その綱要書として論の八句義七十義を簡潔に解説したものが作られ，入門者用の教科書として使われるようになる。それがいわゆる『七十義』文献である。『現観荘厳論』では，論の最初に摂義

として八句義七十義が提示されている。そのため，『現観荘厳論』全体が七十義（項目）にまとめられることは，論自身が表明していることでもある。

チベットでは多くの『七十義』文献が著わされている。その中で著名なものは，セラ - ジェツゥンパ = チェキギャルチェン（Se ra rJe btsun pa Chos kyi rgyal mtshan, 1478-1546）の著わした *mNgon par rtogs pa'i rgyan gyi brjod bya dngos brgyad don bdun cu nges par 'byed pa'i thabs dam pa* であろう。これはセラ寺のドゥラ（入門クラス）の教科書の一つに加えられている。[(3)] 本稿はそれの和訳である。

〈文献と略号〉

1. Se ra rJe btsun pa Chos kyi rgyal mtshan, *bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi brjod bya dngos brgyad don bdun cu nges par 'byed pa'i thabs dam pa*（セラ寺版）(Tshulkrim Kelsang & Shunzo Onoda ed., *Textbooks of Se-ra Monastery for the Primary Course of Studies,* Biblia Tibetica 1, Kyoto, 1985, 所収)（底本）
   Sh. Onoda ed., *rJe btsun pa'i don bdun cu—An Introduction to the Abhisamayālaṅkāra—* (Studia Asiatica No. 6, Nagoya, 1983).（テキストの異同や科文などに関して参照）
2. Se ra rJe btsun pa Chos kyi rgyal mtshan, *rGyan 'grel spyi don Rol mtsho* (ab. *RTsh*) 上・下，青海省，1989.
3. Dar ma rin chen, *rNam bshad snying po rgyan* (ab. rNrG), Gelugpa Student's Welfare Commitee, Central Institute of Higher Tibetan Studies, Sarnath, 1980; Otani No. 10146.
4. *Abhisamayālaṃkāra-prajñāpāramitopadeśa-śāstra* (ab. *AA*), ed. by Th. Stcherbatsky & E. Obermiller, Bibliotheca Buddhica, XXIII, 1929; Pek. No. 5184.
5. *Abhisamayālaṃkāravṛtti* (ab. *AAV*), ed. by C. Pensa, Serie Orientale Roma XXXVII, Roma,1967,（第一章のみ）; Pek. No. 5185.
6. *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (ab. *PVP*), ed. by N. Dutt, Calcutta Oniental Series No.28, London, 1934（第一章のみ）.

〈和訳〉

文殊菩薩に礼拝します。

さて，『現観荘厳論』の所説内容である八句義七十義を解説する中，最初

は，

0. 般若波羅蜜（sher phyin）

般若波羅蜜（prajñāpāmitā, shes rab pha rol phyin pa）は八つの句義によって正しく説明される。 [*AA* I -3ab]

ということに対して，

三つの勝れた特質（khyad chos）によって区別された究竟の智（mthar phyin pa'i ye shes）それが，般若波羅蜜の定義である。それと果の般若波羅蜜（'bras bu sher phyin）とは同一のもの（don gcig）である。

相智（rnam mkhyen）は三つの勝れた特質[(4)]を有している。所依の特別なもの（rten gyi khyad par）は仏陀たる聖者の相続だけにあり，自性の特別なもの（ngo bo'i khyad par）は不二の智（gnyis su med pa'i ye shes）であり，所破を離れている特別なもの（dgag bya dang bral ba'i khyad par）は幻術の如き（sgyu ma lta bu）諦空（bden stong）であるからである。

それを名目（sgras brjod rigs）によって分類をすれば，自性の般若波羅蜜（rang bzhin gyi sher phyin）と典籍の般若波羅蜜（gzhung sher phyin）と道の般若波羅蜜（lam sher phyin）と果の般若波羅蜜との四つがある[(5)]。最初のものは空性（stong nyid）の如きであり，二番目は広・中・略の三つの母（般若経）の如きであり，三番目は菩薩の智（byang sems kyi mkhyen pa）の如きであり，四番目は相智の如きであるからである。

[あるいはまた] 四つの勝れた特質によって区別された究竟の智ということが果の般若波羅蜜の定義である。四つの勝れた特質，すなわち所依の特別なものは仏陀たる聖者の相続だけにあり，自性の特別なものは智であり，行相の特別なもの（rnam pa'i khyad par）は不二（gnyis su med pa）であり，所破を離れている特別なものは幻術の如き諦空である。

自性の般若波羅蜜の地の範囲（sa mtshams）は一切法の上にあり，典籍の般若波羅蜜の地の範囲は，道に入っていない段階（lam ma zhugs）[(6)]から仏地（sangs rgyas kyi sa）までである。道の般若波羅蜜の地の範囲は大乗の資糧道（theg chen gyi tshogs lam）から相続の究竟（rgyun mtha'）[(7)]まで

である。果の般若波羅蜜の地の範囲は仏地だけである。

〈八句義〉

1. 相智（rnam mkhyen）

一切相智者性（sarvākārajñatā, rnam kun mkhyen nyid）と　[*AA* I -3c]

ということに対して，

発心（sems bskyed）などの十[8]を現証する（mngon sum du rtogs pa）究竟の智それが，相智の定義である。それと仏陀たる聖者の相続の智とは同一のものである。

分類すれば，所知のすべての行相を知る相智と因果の主要なものである七十義を知る相智の二つがある[9]。

［相智が存在する］地の範囲は仏地だけにある。

2. 道智（lam shes）

道智者性（mārgajñatā, lam shes nyid）と　[*AA* I -3c]

ということに対して，

［道智］自身を相続に有している人の相続の，空性を現証する智慧によって把握された（zin pa）大乗の聖者の現観（mngon rtogs）というそれが，道智の定義である。それ（道智）と大乗の聖者の智とは同一のものである。

分類すれば，声聞道を知る道智と独覚道を知る道智と大乗の道を知る道智の三つがある。

［道智が存在する］地の範囲は，大乗の見道（theg chen gyi mthong lam）から仏地までである。

3. 事智（gzhi shes）

それから一切智者性（sarvajñatā, thams cad shes pa nyid）である。[*AA* I -3d]

ということに対して，

［事智］自身を相続に有している人の相続の，無我（bdag med）を現証

する智慧[10]によって把握された智であって，小乗の証得（rtogs）の類に属するものそれが，事智[11]の定義である。

それ（事智）と小乗の証得の類に属する聖者の相続の智は同一のものである。

分類すれば，果である母に近い事智（'bras yum la nye ba'i gzhi shes）と，果である母に遠い事智（'bras yum la ring ba'i gzhi shes）と，所対治の事智（mi mthun phyogs kyi gzhi shes）と，能対治の事智（gnyen po phyogs kyi gzhi shes[12]）との四つがある。

［事智が存在する］地の範囲は，全ての聖者の相続においてである。

4. 相等覚加行（rnam rdzogs sbyor ba）

一切相現等覚（sarvākārābhisaṃbodha, rnam kun mngon rdzogs rtogs pa）と　［*AA* I -4a］

ということに対して，

三智の行相を摂して修習する智慧によって把握された菩薩の瑜伽行（sems dpa'i rnal 'byor）それが，相等覚加行の定義である。

それ（相等覚加行）と菩薩の智（byang sems kyi mkhyen pa）は同一のものである。

分類すれば，百七十三ある[13]。

［相等覚加行が存在する］地の範囲は，大乗の資糧道から相続の究竟までである。

5. 頂加行（rtse sbyor）

頂に至ったもの（mūrdhaprāpta, rtse mor phyin）　［*AA* I -4b］

ということに対して，

三智を摂して修習する大乗の資糧道から変化した智慧によって把握された菩薩の瑜伽行それが，頂加行の定義である[14]。

それ（頂加行）と発趣行（'jug sgrub[15]）は同一のものである。

分類すれば，加行道頂加行（sbyor lam rtse sbyor），見道頂加行（mthong lam rtse sbyor），修道頂加行（sgom lam rtse sbyor），無間道頂加行（bar

chad med pa'i rtse sbyor）の四つがある。

［頂加行が存在する］地の範囲は，大乗の加行道の煖（theg chen gyi sbyor lam drod）から相続の究竟までである。

6. 次第加行（mthar gyis sbyor ba）

次第のもの（anupūrvika, mthar gyis pa）　［*AA* I -4b］

ということに対して，

三智の行相に対する堅固さ（brtan pa）を得るために，三智の行相を順次に（rim gyis）修習する智慧によって把握された菩薩の瑜伽行それが，次第加行の定義である。

分類すれば，六波羅蜜次第加行（phar phyin drug gi mthar gyis sbyor ba）の六つと，六随念次第加行（rjes dran drug gi mthar gyis sbyor ba）の六つと，無自性次第加行（dngos med ngo bo nyid kyi mthar gyis sbyor ba）の一つとの十三ある。

［次第加行が存在する］地の範囲は，大乗の資糧道から相続の究竟の［一刹那］前までである。

7. 刹那加行（skad cig ma'i sbyor ba）

一刹那現等覚（ekakṣaṇābhisaṃbodha, skad cig gcig mngon rdzogs byang chub）　［*AA* I -4c］

ということに対して，

三智の行相に対する堅固さを得た菩薩の瑜伽行の究竟（mthar thug）それが，刹那加行の定義である。

それ（刹那加行）と相続の究竟の智（rgyun mtha'i ye shes）は同一のものである。

分類すれば，異熟の刹那加行（rnam par smin pa'i skad cig ma'i sbyor ba），不異熟の刹那加行（rnam par smin pa min pa'i skad cig ma'i sbyor ba），無相の刹那加行（mtshan nyid med pa'i skad cig ma'i sbyor ba），不二の刹那加行（gnyis su med pa'i skad cig ma'i sbyor ba）の四つがある。

［刹那加行が存在する］地の範囲は，相続の究竟［の刹那］だけである。

8. 果である法身（'bras bu chos sku）

法身（dharmakāya, chos kyi sku）とのそれが八種である　[*AA* I-4d]

ということに対して，

[法身] それ自身を獲得させる方法となっている三智の行相を修習することによって獲得された究竟の果（'bras bu mathar thug）それが，果である法身の定義である。

それ（法身）と仏陀は同一のものである。

分類すれば，自性身（ngo bo nyid sku），智法身（ye shes chos sku），受用身（longs sku），変化身（sprul sku）の四つある。[16]

[法身が存在する] 地の範囲は，仏地だけである。

〈I. 一切相智〉

1. 大乗の発心（theg chen sems bskyed）

発心（cittotpāda, sems bskyed pa）と　[*AA* I-5a]

ということに対して，

[発心] それ自身に相伴なう（grogs su gyur pa）利他のために等覚を所縁とする欲（'dun pa）と相応し，大乗の道に入る門（theg chen lam gyi 'jug sgo）となる道の類に含まれるものに分類される大乗の主要な特別な意識それが，[17] 大乗の世俗の発心[18]の定義である。

その中，自性によって分類すれば，誓願の発心（smon pa sems bskyed）と悟入（発趣）の発心（'jug pa sems bskyed）の二つある。[19]

喩えによって分類すれば，地の如き発心（sa lta bu'i sems bskyed），金の如き発心（gser -），月の出現の如き発心（zla ba tshes pa -），火の如き発心（me -），倉庫の如き発心（gter -），宝の鉱山の如き発心（rin po che'i 'byung gnas -），海の如き発心（rgya mtsho -），金剛の如き発心（rdo rje -），山王の如き発心（ri yi rgyal po -），薬草の如き発心（sman pa -），善知識の如き発心（dge ba'i bshes gnyen -），如意珠の如き発心（yid bzhin nor bu -），

光の如き発心（nyi ma -），法の美しい歌声の如き発心（chos kyi glu dbyangs snyan pa -），王の如き発心（rgyal po -），鉱山の如き発心（bang mdzod -），大道の如き発心（lam po che -），乗物の如き発心（bzhon pa -），泉の水の如き発心（bkod ma'i chu -），喜びの言葉の如き発心（sgra snyan po -），河の流れの如き発心（chu bo'i rgyun -），雲の如き発心（sprin -）との二十二ある。

> そしてそれ（発心）は地，金，月，火，倉庫，宝の鉱脈，海，金剛，山，薬草，友，如意珠，日，歌，王，蔵，大道，乗物，泉の水，喜びの言葉，河，雲［の如く］によって二十二種である。［*AA* I-19, 20］

と説かれているからである。[20]

［発心が存在する］地の範囲は，大乗の資糧道から仏地までである。

2. 大乗の教誡（theg chen gyi gdams ngag）

> 教誡（avavāda, gdams ngag）と　［*AA* I-5a］

ということに対して，

大乗の発心の目指すべきものを獲得する方便を説く大乗の言葉（theg chen gyi ngag）それが，大乗の教誡の定義である。

その中，自性によって分類すれば，大乗の教導の教誡（'doms pa'i gdams ngag）と大乗の教授の教誡（rjes bstan gyi gdams ngag）がある。

教導の仕方によって分類すれば，行の自性に対する教導の教誡（sgrub pa rang gi ngo bo la 'doms pa'i gdams ngag），所縁境（dmigs yul）である四諦に対する教導の教誡（bden pa bzhi la -），所依（rten）である三宝に対する教導の教誡（dkon mchog gsum la -），無執着の精進をなすことに対する教導の教誡（ma zhen pa'i brtson 'grus la -），無疲労の精進をなすことに対する教導の教誡（yongs su mi ngal ba'i brtson 'grus la -），道を摂取する精進をなすことに対する教導の教誡（lam yongs su 'dzin pa'i brtson 'grus la -），肉眼（sha'i spyan）と天眼（lha'i spyan）と慧眼（shes rab kyi spyan）と法眼（chos kyi spyan）と仏眼（sangs rgyas kyi spyan）の五眼

に対する教導の教誡（spyan lnga la -），神変通（rdzu 'phrul gyi mngon shes）と天耳通（lha'i rna ba'i -）と他心通（gzhan sems shes pa'i -）と宿命通（sngon gyi gnas rjes su dran pa'i -）と天眼通（lha'i mig gi -）と漏尽通（zag pa zad pa'i -）の六神通に対する教導の教誡（mngon shes drug la -），見道に対する教導の教誡（mthong lam la -），修道に対する教導の教誡（sgom lam la -）との十がある。

行，［四］諦，仏宝などの三つ，無執着，無疲労，道の摂取，五眼，六神通の功徳，見道と修習と呼ばれるものに対してであるので，教誡は十からなっていると知られるべきである。 [*AA* I -21～22]

と説かれているからである。

［教誡が存在する］地の範囲は，道に入っていないところ（lam ma zhugs）から仏地までである。

3. 大乗の加行道（theg chen gyi sbyor lam）

四種の順決択分支分（nirvedhāṅga, nges 'byed yan lag）と [*AA* I -5b]

ということに対して，

順解脱分（thar pa cha mthun）の円満に随順する現観の類に属し，諦現観（bden pa mngon rtogs）に順ずる大乗の世間道（'jig rten pa'i lam）それが，大乗の加行道の定義である。[21] それと大乗の順決択分（theg chen gyi nges 'byed cha mthun）は同一のものである。

分類すれば，大乗の加行道は，煖（drod）と頂（rtse mo）と忍（bzod pa）と世第一法（chos mchog）との四つである。

［加行道が存在する］地の範囲は，大乗の加行道だけである。

4. 行の所依（種姓）（sgrub pa'i rten）

法界を自性とする行の所依（pratipattyādhāra, sgrub pa yi rten）[*AA* I -5cd]

ということに対して，

菩薩の相続の法性（chos nyid）でもあり，大乗の行の直接の所依事

(rten gzhi) となってもいる同一のものそれが，大乗の行の所依たる本来的な種姓[22]の定義である。

分類すれば，能依の法 (brten chos) である十三の行 (sgrub pa) の十三の法性がある。十三の行，すなわち，大乗の順決択分の四つと大乗の見道・修道の二つとの六つの証得法 (rtogs pa'i chos drug)，能対治の行 (gnyen po'i sgrub pa)，断の行 (spong pa'i -)，これら二つに完全に至る行 (de dag yongs su gtugs pa'i -)，智慧と慈悲を有した行 (shes rab snyin brtser bcas pa'i -)，弟子と不共なる行 (slob ma mthun mong min pa'i -)，利他を次第になす行 (gzhan don go rims du byed pa'i -)，智を無功用に活動させる行 (ye shes rtsol ba mi mnga' bar 'jug pa'i -)，の種類があるからであって，

> 六つの証得法，能対治，断，それら［能対治と断の］二つ［に対する分別］の滅尽，智慧と慈悲，弟子と不共であるもの，利他を次第になすもの，そして無功用に働く智，の所依に対して種姓と言われる。 [*AA* I -37～38]

と説かれているからである。

［行の所依が存在する］地の範囲は，大乗の資糧道から相続の究竟までである。

5. 行の所縁 (sgrub pa'i dmigs pa)

> 所縁 (ālambana, dmigs pa) と [*AA* I -6a]

ということに対して，

大乗の行によって断ぜられるべき増益 (sgro 'dogs) の事物 (gzhi) それが，大乗の行の所縁の定義である。それと所知 (shes bya) とは同一のものである。

それを分類すれば，善 (dge ba)，不善 (mi dge ba)，無記 (lung ma bstan)，世間的な五蘊 (phung po lnga)，出世間 ('jig rten las 'das pa) の四静慮 (bsam gtan bzhi)，有漏 (zag bcas) の五取蘊 (nyer len gyi phung po lnga)，無漏 (zag med) の四念処 (dran pa nyer gzhag bzhi)，有為

('dus byas) の三界 (khams gsum), 無為 ('dus ma byas) の真如 (de bzhin nyid), 共 (thun mong ba) なる四静慮, 不共 (thun mong ma yin pa) である牟尼の十力 (thub pa'i stobs bcu) であって, 十一あるからである。

> [行の] 所縁は一切の諸法である。さらにそれら [一切の諸法と] は, 善などであり, 世間的な証得と呼ばれるもの, 出世間的なものであると考えられる。さらに, 有漏と無漏の諸法, 有為と無為なる [諸法], 弟子と共なる諸法と牟尼の不共なる [諸法] である。[*AA* I -40～41]

と説かれているからである。

[行の所縁が存在する] 地の範囲は, 存在する限りの事物 (gzhi grub tshad) の上にある。

6. 行の所期 (sgrub pa'i ched du bya ba)

所期 (samuddeśa, ched) と [*AA* I -6a]

ということに対して,

あるものの目的とされることに入る究竟の果 ('bras bu mthar thug) それが, 大乗の行の所期の定義である。それと仏陀は同一のものである。

分類すれば, 大心 (sems dpa' chen po), 大断 (spong ba chen po), 大証得 (rtogs pa chen po) の三つがある。

> 一切の有情の最勝性である心と断と証得における三つの大性によって, 自存者たちのこの所期が知られるべきである。 [*AA* I -42]

と説かれているからである。

[行の所期が存在する] 地の範囲は, 仏地だけである。

7. 被鎧行 (go sgrub)

被鎧 (sannāha, go cha) と [*AA* I -6b]

ということに対して,

布施などのそれぞれの波羅蜜の中で, 六つと六つに完全にまとめて実践しようとする広大な意思の働き (bsam pa'i bya ba rgya chen po) に把握され

た菩薩の瑜伽行（sems dpa'i rnal 'byor）それが，被鎧行の定義である。それと菩薩の智（byang sems kyi mkhyen pa）は同一のものである。

分類すれば，布施（sbyin pa）の被鎧行の六つ，戒（tshul khrims）の被鎧行の六つ，忍辱（bzod pa）の被鎧行の六つ，精進（brtson 'grus）の被鎧行の六つ，禅定（bsam gtan）の被鎧行の六つ，智慧（shes rab）の被鎧行の六つの三十六ある。[23]

> それらはそれぞれ布施・布施などの六種として摂せられるので，被鎧行なるそれは六と六として［経典に］説かれる如くである。［*AA* I -43］

と説かれているからである。

［被鎧行が存在する］地の範囲は，大乘の資糧道から相続の究竟までである。

8. 発趣行（'jug sgrub）

> 発趣（prasthiti, 'jug pa）の所行と　［*AA* I -6b］

ということに対して，

大乘の因果の法（rgyu 'bras kyi chos）のいずれかを実行する，精進を主要なものとなすことによって実践する菩薩の瑜伽行それが，発趣行の定義である。

それを分類すれば，［四］静慮と［四］無色（gzugs med）に発趣する行，布施などの六波羅蜜に発趣する行，見道・修道・無学道（mi slob lam）・勝進道（khyad par gyi lam）に発趣する行，慈（byams）などの四無量（tshad med bzhi）に発趣する行，不可得（dmigs pa med pa）を有したものに発趣する行，三輪清浄（'khor gsum rnam par dag pa）に発趣する行，所期（ched du）に発趣する行，六神通に発趣する行，一切相智者性に発趣する行との九ある。

> 静慮・無色，布施など，道，慈など，不可得，三輪清浄，所期，六神通，一切相智者性，の方軌に発趣する行は，大乘に出立するものであると知られるべきである。　［*AA* I -44～45］

と説かれているからである。

［発趣行が存在する］地の範囲は，大乗の加行道の煖から相続の究竟までである。

9. 資糧行（tshogs sgrub）

資糧（saṃbhāra, tshogs）と　［*AA* I -6c］

ということに対して，

広大な二種の資糧によって把握された，大乗の加行道世第一法の中・下品より勝れており，自らの果である大菩提（byang chen）[24]を引発する菩薩の瑜伽行それが，資糧行の定義である。

それを分類すれば，大悲（snying rje chen po）の資糧行，布施の資糧行，戒の資糧行，忍辱の資糧行，精進の資糧行，静慮の資糧行，智慧の資糧行，止（zhi gnas）の資糧行，観（lhag mthong）の資糧行，双運道（zung du 'brel ba'i lam）の資糧行，方便善巧（thabs mkhas）の資糧行，智（ye shes）の資糧行，福徳（bsod nams）の資糧行，道（lam）の資糧行，陀羅尼（gzungs）の資糧行，地（sa）の資糧行，能対治の資糧行の十七ある。

慈悲，布施などの六つ，止，観，双運道，方便善巧，智慧，福徳，道，陀羅尼，十地，能対治が，資糧行の次第であると知られるべきである。　［*AA* I -46～47］

と説かれているからである。

［資糧行が存在する］地の範囲は，大乗の加行道世第一法上品から相続の究竟までである。

10. 出離行（nges 'byung sgrub pa）

出離（niryāna, nges par 'byung）とが，牟尼の一切相智者性である。　［*AA* I -6cd］

ということに対して，

相智を必ずはっきりと引発する清浄地（dag sa）[25]の瑜伽行それが，出離行の定義である。

それを分類すれば，所期の出離行，平等性（mnyam pa nyid）の出離行，

有情利益（sems can gyi don）を成就する出離行，無功用自然（'bad med lhun gyis）に成就する出離行，常と断の辺（rtag chad kyi mtha'）から離れる出離行，三乗の義を獲得する出離行，一切相智者性の出離行，道を対境とする出離行の八つある。

> 所期における，平等性における，有情利益［の成就］における，無功用の成就における［出離］，［二］辺における出離，［三乗の］獲得を相とした出離，一切相智者性における出離，道を行境とした出離というこれら八種を本性としたものが出離行であると知られるべきである。　［*AA* I -72～73］

と説かれているからである。

［出離行が存在する］地の範囲は三つの清浄地である。

〈II．道智〉

1．道智の支分（lam shes kyi yan lag）

> 暗くするなど（dhyāmīkaraṇatādi, mog mog por byed la sogs）
> ［*AA* I -7a］

ということに対して，

道智の因（rgyu）と自性（ngo bo）と果（'bras bu）の三つのいずれかに摂せられる大悲によって把握された特別な功徳を有したものそれが，道智の支分の定義である。

それを分類すれば，道智の支分となったものには，障害の現行（gegs mngon pa）である慢心（nga rgyal）が現行することを離れること，取蘊（nyer len）が大乗としての種姓であると目覚めること，俱生縁（mthun rkyen）である発菩提心（byang chub tu sems bskyed pa），道智の自性（rang bzhin），道智の作用（byed las）の五つがある。

> ［道智の支分は］諸天を［発心の器に］ふさわしくするために［如来の］光明によって［諸天の光明を］暗くすること，決定した対境，［大乗種姓に］遍充されていること，［利他を成就するという］自性，

そしてその［時にあらずしては実際を現前化しないという］作用である。　［*AA* II-1］

と説かれているからである。

［道智の支分が存在する］地の範囲は，大乗としての種姓に目覚めてから仏地までである。

2. 声聞道を知る道智（nyan thos kyi lam shes pa'i lam shes）

弟子（śiṣya, slob ma）と　［*AA* I-7b］

ということに対して，

発心と廻向（bsngo ba）と空性を証得する智慧の三つに把握されることによって，所化（gdul bya）である声聞の種姓を有する者を摂取する（rjes su gzung ba）ために知られるべき現観の類に属する大乗の聖者の智それが，声聞道を知る道智の定義である。それと声聞の証得の類に属する大乗の聖者の智は同一のものである。

それを分類すれば，菩薩たる聖者の相続の声聞道を知る道智，仏陀たる聖者の相続の声聞道を知る道智の二つがある。

［声聞道を知る道智が存在する］地の範囲は，大乗の見道から仏地までである。

3. 独覚道を知る道智（rang rgyal gyi lam shes pa'i lam shes）

犀の道（khaḍgapatha, bse ru'i lam）と　［*AA* I-7b］

ということに対して，

三つの勝れた特質[26]に把握されることによって，所化である独覚（rang rgyal）の種姓を有する者を摂取するために知られるべき現観の類に属する大乗の聖者の智それが，独覚道を知る道智の定義である。それと独覚の証得の類に属する大乗の聖者の智は同一のものである。

それを分類すれば，菩薩たる聖者の相続の独覚道を知る道智，仏陀たる聖者の相続の独覚道を知る道智の二つがある。

［独覚道を知る道智が存在する］地の範囲は，大乗の見道から仏地までである。

4. 大乗の見道（theg chen gyi mthong lam）

此世と他世の功徳による大きな利益である見道（dṛṅmārga, mthong ba'i lam）と　[*AA* I-7cd]

ということに対して，

［見道］それ自身を相続に備えている人の相続の，空性を現証する智慧に把握された大乗の諦現観（bden pa mngon rtogs）それが，大乗の見道の定義である。

それを分類すれば，大乗の見道の禅定智（mnyam bzhag ye shes）[27]，大乗の見道の後得智（rjes thob ye shes），それら二つのいずれでもない大乗の見道[28]の三つがある。

［見道の存在する］地の範囲は，大乗の見道だけである。

5. 大乗の修道の作事（働き）（theg chen gyi sgom lam gyi byed pa）

作事（kāritra, byed pa）と　[*AA* I-8a]

ということに対して，

［修道］それ自身を獲得する方便となった大乗の修道の修習力によって獲得された利益（phan yon）それが，大乗の修道の作事の定義である。

それを分類すれば六つあって，心を自力なるものとすることを完全に寂静にする，一切の人を敬う，煩悩との戦いに勝利する，苦の圧迫（sdug bsngal gyi gnod pa）によっていかなる時も蹂躙がない，菩提を成就する能力を有する，所依たる菩薩の修道に入った場所が供養の対象（mchod rten）となるという［六つの］修道の作事があるからである。

［修道の作事は］完全に［心を］制御すること，一切に帰依すること，煩悩に勝利すること，害に蹂躙されないこと，菩提，［般若波羅蜜の］依処を供養することである。[*AA* II-17]

と説かれているからである。

［修道の存在する］地の範囲は，大乗の修道を修習する第二刹那から仏地までである。

6. 勝解修道（theg chen gyi mos pa sgom lam）

勝解（adhimukti, mos pa）と　[*AA* I -8a]

ということに対して，

母は三つの利益[29]を生じる処（gnas）であると信ずる（yid ches pa）大乗の随現観（rjes la mngon rtogs[30]）それが，大乗の勝解修道の定義である。

それを根本によって分類すれば，自利（rang don）の勝解修道，二利（gnyis don[31]）の勝解修道，利他（gzhan don）の勝解修道の三つある。

支分によって分類すれば，三つそれぞれにおいて，下・中・上品の三つ三つがあり，九つある。

細支分によって分類すれば，九つそれぞれにおいて，さらに下・中・上品の三つ三つがあり，二十七ある。

勝解は，自利，自利・利他，利他の三種であると知られるべきである。これはまた，下，中，上品があって，それぞれが三種であると考えられる。さらに下下品などに分類されることにより，それはまた三種であるから，それは二十七種であると考えられる。[*AA* II-18～19]

と説かれているからである。

[勝解修道の存在する] 地の範囲は，初地（sa dang po）から相続の究竟までである。

7. 勝解修道の利益（mos pa sgom lam gyi phan yon）

称讃・称揚・讃嘆（stuta-stobhita-śamśita, bstod dang bkur dang bsngags pa）　[*AA* I -8b]

ということに対して，

[修道] それ自身を獲得させる方便となった勝解修道の修習力によって獲得された利益それが，勝解修道の利益の定義である。

それを分類すれば，九つの称讃（bstod pa），九つの称揚（bkur ba），九つの讃嘆（bsngags pa）がある。

般若波羅蜜に対する勝解の段階に対して，[仏陀や菩薩たちによる] 称讃・称揚・讃嘆の三が [それぞれ] 九あると考えられる。[*AA*

II-20]

と説かれているからである。

［勝解修道の功徳が存在する］地の範囲は，勝解修道を修習する第二刹那から仏地までである。

8. 廻向修道（bsngo ba sgom lam）

廻向（pariṇāma, bsngo）と　［*AA* I-8c］

ということに対して，

自他のいずれかの善根（dge rtsa）を正等覚の支分に転換せしめる（sgyur bar byed pa），語と［その］対象を混ぜて捉える分別（sgra don 'dres rung du 'dzin pa'i rtog[32]）を有した大乗の随現観それが，廻向修道の定義である。

それを分類すれば十二あって，特別な廻向を有した有名の廻向修道（bsngo ba khyad par can gyi ming can gyi bsngo ba sgom lam），不可得の行相を有した有名の廻向修道（mi dmigs pa'i rnam pa can gyi -），不顚倒の特質を有した有名の廻向修道（phyin ci ma log pa'i mtshan nyid can gyi -），遠離の有名の廻向修道（dben pa'i[33] -），仏陀の福徳の資糧の自性を憶念する有名の廻向修道（sangs rgyas kyi bsod nams kyi tshogs kyi rang bzhin dran pa'i -），方便善巧を有した有名の廻向修道（thabs mkhas dang bcas pa'i -），無相の有名の廻向修道（mtshan ma med pa'i -），仏陀によって随喜される有名の廻向修道（sangs rgyas kyis rjes su yi rang ba'i -），三界に属さない有名の廻向修道（khams gsum du ma gtogs pa'i -），下品の廻向の有名の廻向修道（bsngo ba chung ngu'i -），中品の廻向の有名の廻向修道（bsngo ba 'bring gi -），上品の廻向の有名の廻向修道（bsngo ba chen po'i -）の十二がある。

特別な廻向がある。そ［廻向］の作事は最上である。それは不可得の行相を有したもの，不顚倒の相のあるもの，遠離したもの，仏陀の福徳資糧の自性を憶念する領域を有したもの，方便を有したもの，無相のもの，仏陀によって随喜されたもの，三界に属さないもの，

そして大福徳を生ずる下・中・上品の別な三種の廻向である。

[*AA* II-21～23]

と説かれているからである。

[廻向修道の存在する] 地の範囲は，初地から相続の究竟までである。

9. 随喜修道（rjes su yi rang sgom lam）

随喜（anumoda, rjes su yi rang ba）である無上作意 [*AA* I-8cd]

ということに対して，

自他のいずれかの善根（dge rtsa）を喜ぶこと（dga' ba）を修する，語と[その] 対象を混ぜて捉える分別を有した大乗の随現観それが，随喜修道の定義である。

それを分類すれば，自らの善根を喜ぶことを修する随喜修道，他者の善根を喜ぶことを修する随喜修道の二つがある。

方便と不可得 [の智慧] の二によって善根を随喜することが随喜作意の修道であると，ここで語られる。 [*AA* II-24]

と説かれているからである。

[随喜修道が存在する] 地の範囲は，初地から相続の究竟までである。

10. 成就行修道（sgrub pa sgom lam）

成就行（nirhāra, sgrub）と [*AA* I-9a]

ということに対して，

無漏の大乗の随現観なるものであって，それ自ら獲得されるものとなる究竟の証得の痕跡（lag rjes）を残しているものそれが，成就行修道の定義である。それと清浄修道（rnam dag sgom lam）は同一のものである。

分類すれば，自性が特別なものとなった成就行修道，最高の果によって特別なものとなった成就行修道，作用が特別なものとなった成就行修道，階位の功徳によって特別なものとなった成就行修道，大利益究竟（don chen po mthar thug）の功徳と果なる地の成就行修道の五つがある。

[成就行は] それの自性と [果の] 最高性，一切のものが無造作であること，不可得ということによって諸法が設定されること，[究

竟の果の］大利益性である。　［*AA* Ⅱ-25］

と説かれているからである。

［成就行修道が存在する］地の範囲は，初地から第十地までである。

11. 清浄修道（rnam dag sgom lam）

畢竟清浄（atyantaṃśuddhi, shin tu dag pa）というこれは，修道であり，智慧ある菩薩たちのものであると道智性が説かれる。［*AA* Ⅰ-9abcd］

ということに対して，

無漏の大乗の随現観なるものであって，それ自ら獲得されるものとなる断（spangs pa）で究竟に至った痕跡を残しているものそれが，清浄修道の定義である。

それを分類すれば，空性を現証する九地[34]に［それぞれ］九の清浄修道がある。

下下品などの道が［三界の］九地における清浄である。［下下品などの道は順次に］上上品などの垢の能対治であるからである。［*AA* Ⅱ-30］

と説かれているからである。

［清浄修道が存在する］地の範囲は，初地から第十地までである。

〈未完〉

(1)　『現観荘厳論』は般若経の内容項目を列挙したような極めて簡潔な論書であり，注釈によらなければ理解は困難であろう。そのためインドにおいても多くの注釈書が作られている。また，ハリバドラが『現観荘厳論明義釈（*Abhisamayālaṃkāraśāstravṛtti Sphuṭārthā*）』（『小註』）を著わしてからは，それに対する複注も作られている。拙論（1984）「『現観荘厳論』の註釈文献について」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』No.2, 1984）参照。

(2)　チベットにおける般若経や『現観荘厳論』の学的伝統の形成については，拙論（1989）「『現観荘厳論明義釈，心髄荘厳』和訳(1)」（『佛教学セミナー』No.50, 1989）参照。

(3) その他の『七十義』文献として，ジャムヤンシェパ（'Jam dbyangs bzhad pa,）の *dNgos bo brgyad don bdun cu'i rnam bzhag legs par bshad pa*（*The Collected Works of 'Jam dbyangs bzad pa'i rdo rje*, vol.15, 1973）などがある。

(4) すぐ後に示される「所依の特別さ」「自性の特別さ」「所破を離れる特別さ」の三つである。

(5) ハリバドラは『大註』において般若波羅蜜を名目上三つとする。仏陀の幻術の如き無二智，それを獲得するための典籍，そして道とである。最初のものが本質的なものであり，後の二つは二次的に般若波羅蜜と呼ばれる。（*AA* p.23）タルマリンチェンもこれを踏襲しているが，四つとする考え方にも言及している。（*rNrG* p.60）

(6) これは発心の前で，資糧道に入っていない段階である。（*rNrG* p.67）

(7) 相続の最後の刹那であり，次刹那に仏地に至る。

(8) *AA* 第一章「一切相智者性」に説かれる発心乃至出離行の十法である。

(9) タルマリンチェンは，ここでは後者が意図されているとする。

(10) Onoda（1983）は shes rang kyis zin pa'i となっているが，他の版やタルマリンチェンの定義を参照して，shes rab kyis zin pa'i とする。

(11) 一切智者性は四諦十六行相である根本事（vastu）を現証する智慧であるからチベットでは事智とも呼ばれる。

(12) タルマリンチェンによれば，ここでの所対治分と能対治分の二つの事智の区別は，十六行相を証得する事智自身が特別な慈悲と智慧によって把握されるかされないかということによってなされる。単に空性を証得する智慧そのものは能対治分の事智とは呼ばれない。（*rNrG* p.332）

(13) 事智の行相は苦・集・滅の三諦に対して各四，道諦に対して十五あるから合計二十七である。道智の行相は因である集と道諦に対してそれぞれ八と七，果である苦と滅諦に対してそれぞれ五と十六あるから合計三十六である。相智の行相は四念処の行相乃至十力等の仏位の行相で合計百十である。これらを合わせて総計百七十三となる。（*AA* Ⅳ-2～5 参照）

(14) タルマリンチェンによれば，頂加行の定義は，空性を所縁とする修所成の智慧によって把握されることによって三智の行相を完全に修した菩薩の瑜伽行である。（*rNrG* p.69）

(15) 相智の中の第 8 番目の項目の「発趣行」である。

(16) ハリバドラは四身説を主張するが，ラトナーカラシャーンティ（Ratnākaraśānti）は三身説の立場をとる。彼の *Sāratamā* の伝える *AA* I-17 偈によれば，

svābhāvikaḥ sasāṃbhogo nairmāṇika iti tridhā/ dharmakāyaḥ sakāritraś caturdhā samudīritah//（法身は自性の，受用の，変化の［身］という三種と作用との四種が説かれる）となっている。（Jaini ed. p.172.）これはアーリヤヴィムクティセーナやハリバドラの注釈において伝えられる偈とは異なっており，三身説の立場を明示したものとなっている。この改変の経緯については佐久間

(1992)「『現観荘厳論』をめぐる三身説グループによる第一章第十七偈改変の経緯」(『真野龍海博士頌寿記念論文集　般若波羅蜜多思想論集』, 1992) を参照。このような立場の違いはチベットにも持ち込まれている。ゲルク派は四身説をとるが，サキャ派のコランパは三身説をとる。佐久間秀範 (1986)「『現観荘厳論』法身章をめぐって(1)—コラムパ『現観荘厳論釈』第八章—」(『チベットの仏教と社会』1986, 所収) 参照。

(17)　アーリヤ＝ヴィムクティセーナによれば，発心は心 (意識) であり，菩提を求める欲 (心所) と相応する。(*AAV* p.15)

(18)　セラ－ジェツゥンパは *RTsh* p. 148, p. 155 の中で，『大乗荘厳経論』を典拠にしながら，名目上，発心を二種に分ける。勝義の発心と世俗の発心である。前者は空性を理解した大乗の智慧のことである。

(19)　この二種の発心は『華厳経』「入法界品」『入菩提行論』に説かれている。磯田熙文 (1980)「Cittotpāda について」(『印度学仏教学研究』No.19-1, 1980) 参照。また，小谷信千代・ツルティムケサン『仏教瑜伽行思想の研究』(文栄堂，1991) pp.65-66 にもこの二種の発心が言及されている。

(20)　Conze (1954) *Abhisamayālaṃkāra*, SOR Vol.VI, 1954, p. 10 が指摘するように，同様な発心の22の譬喩が『大乗荘厳経論』(Ⅳ-15～20) に出ており，それに対する長行で *Akṣayamatisūtra* (『無尽意経』) を典拠にしていることが明示されている。

(21)　この大乗の加行道は，所縁・行相・因・摂取の点から，そして四種分別に繋縛されているから，声聞・独覚の加行道よりも勝れているとされる。(*AA* I-25～26)

(22)　『菩薩地』「種姓品」に二種の種姓，即ち，本来的な種姓 (prakṛtisthaṃ gotram, rang bzhin gnas rigs) と修得された種姓 (samudānītaṃ gotram, yang dag par bsgrubs pa'i rigs) が説かれている。(Wogihara ed. p. 3)

(23)　布施乃至般若波羅蜜のそれぞれがさらに六つに分けられる。布施布施・布施戒乃至般若禅定・般若般若である。*PVP* pp.176-179 によれば，布施波羅蜜において行じている菩薩大士が，布施を一切有情に共通になして無上菩提に廻向する，これが布施をする菩薩大士の布施波羅蜜の鎧であり，乃至，幻術によって作られたとの想に住して施者・受者・施物を認識しない，これが布施をする菩薩大士の般若波羅蜜の鎧である」などと語られる。

(24)　菩薩はそれぞれ独自の誓願を立てて資糧を積み，その独自の誓願に応じた独自の果である大菩提を得る。

(25)　第八・九・十地の三地である。

(26)　前項において述べられた発心・廻向・空性を証得する智慧の三つである。

(27)　禅定における根本無分別智のことである。

(28)　セラ＝ジェツゥンパの考え方で，根本智において現行しない慈悲心と，後得智において現行しない根本無分別智の二つが別に立てられて第三とされる。

(29)　自利・利他・自利利他の三つである。

(30) 随現観とは見道に随順する現観で，修道のことである。

(31) 自利利他のことである。

(32) チベットでは分別は三種であると考えられている。「虚妄分別（yang dag pa ma yin pa'i kun rtog)」と「粗大概念の行相を持つもの（sems rtsing ba'i rnam pa can)」と，ここに説かれる「語と［その］対象を混ぜて捉える分別」である。この三番目のものが加行道などの世間道の分別のあり方である。

(33) Onoda ed. は bden pa'i となっているが，『小註』や『注釈，心髄荘厳』により dben pa'i と訂正する。

(34) 三界の九地，すなわち欲界，四静慮，四無色である。